佳　作

# 「農業のミッキーに」

群馬県立勢多農林高等学校
動物科学科　2年　山本 美織子

「そんなに牧場が好きなら、自分で牧場作っちゃえばいいじゃない。」
私が小学校3年生の春、母がそう言った。小学校1年の時に、“牧場”というものを知ってからというもの、私はずっと酪農のことなどを考え続けていた。それほど私にとって、“牧場”というものは何か魅力的なものがあったのだ。そんな私を見た母は、ある日私にそんなことを言った。

私はその一言からさらに色々なことを考え始めた。その日の算数の時間、先生に怒られるほど考えていたのをよく覚えている。

それから、私の夢はアバウトに始まった。最初はただ単に「牧場やりたい」と思うだけだったが、そのうち「兄弟でやれたら楽しそう」「広い牧草地があったらいいな」など、私の夢は日増しに膨らんできた。

農家育ちの母は私に色々なことを教えてくれ、曖昧な私の夢を楽しそうに応援してくれた。でも、私の家にはお金があるわけでも土地があるわけでもなく、「牧場を作りたい!」という私の夢は小さな子が「大きくなったらミッキーになりたい!」というのと同じような理想だったのだ。

そしてアバウトな夢を持ったまま、私は高校生になる。

高校へ入学すると、期待通りの魅力的な授業がたくさんあった。とにかく“実習”と名のつくものは全て胸躍らせた。

“総合実習”は、運良く一番初めの時間が養牛だった。臭いに慣れず最初は大変だったが、慣れてくるにつれ恐る恐る牛に抱きついてみたり、知らぬ間に舐められて実習着がベトベトになったりもした。班のみんなと楽しく作業できた。

まだ牛が近づいてきただけで叫び声をあげるような時だったが、春先の肌寒い中、牛の体は暖かかった。

また、“農業科学基礎”も最初から実習で、植物とふれあった。最初はトウモロコシを。次は班で決めた作物を育てた。自分で種を蒔いた作物が芽を出したのを見たときは、すごく感動的だった。農薬をあまり使わないで育てたトウモロコシは、たくさんの虫においしくいただかれていた。でも母から「虫食いの野菜は虫が食べるおいしい野菜」だと教えられていたので、安心して取れたてトウモロコシを生で食べた。自分で育てたものは、よりいっそう美味しいものだった。みんなで笑い合いながら食べていた。

将来、動物だけでなく作物も自分で作れるといいな。と思う様になった。自給自足の生活ができたら面白そうだなと考えていた。

そしてある日、農場に毎日のように通っている先輩を見た。先輩は主に豚舎の手伝いをしていたのだが、仕事がテキパキとでき、豚のことなら何でも分かっているようだった。

私もあんなふうに動物とふれあいたいと思い、私も下校時に農場に通うことにした。

農場当番の人と搾乳を手伝って、当番の人が帰ってからも農場に残った。よくブラッシングを頼まれ、牛を間近で見るようになった。長い間ブラッシングをしていると、牛も気持ち良いのか草を食べる口を止める。そしてブラッシングを止めると、「もうちょっと!」と言うように牛がこっちを向いてくる。そんな牛たちがたまらなく可愛く思えた。

でもまだ牛の扱いに慣れておらず、先生に迷惑をかけるばかりだった。

1年生のうちは、気が向いたときにたまに寄る程度だった。

でもせっかく立派な農場があるのだし、できるだけ有効利用しようと、2年生になってからはほぼ毎日行くよう心がけた。実習でもよく牛にあたっていたし、1年の夏休みに牧場研修もしていたので、なんとか前よりは動けるようになっていた。牛の扱いや作業も以前よりはこなせるようになり、自分自身に余裕ができた。牛を観察する時間が増え、よりいっそう牛に愛着がわいてきた。

今まで冗談でしかなかった夢が、現実味を帯びてきた。

私は自分の牧場を持ちたい。

動物が気持ち良く動けるような、広大な牧草地のある牧場を作ってみたい。ひどくアバウトだが、この土地がなければ私は牧場はやりたくないと思う。

牛にとって牧場内というのは自分の世界の全てなんだと思う。だったらその中で、できるだけたくさんの物を見ていてほしい。“どうしたら人が来てくれる牧場になるか”ではなく、“どうしたら牛が快適に過ごせる牧場になるか”を考えたいと思う。牧場の主人公は家畜自身である。そんな牧場を作ってみたいと思う。

ただ、今物価の高騰でたくさんの農家が廃業になっている。エサ代の増加などで、施設増築の借金を返せなくなったからだと聞いた。それを考えると、観光事業に手を出す牧場があっても仕方ないことのように思える。

そんな中生き残っている農家は、増築などに手を出さず細々とやっている家族経営の農家だという。

私も多くを望まず、田舎で細々と暮らしたいと思っている。どうやら日本には過疎地域が多数あって、土地や動物を貸してくれる場所もあるらしい。それを聞いたときは、胸が躍った。私はそういう所で自給自足の生活をしてみたい。自分で野菜を育てて、動物を飼って。ライフラインだって自分でやる気になればなんとかなるそうだ。いつかそんなことができるような知識もつけたいと思う。

一応目的としては、雪などで道がふさがって世間から孤立しても、焦らないで生活して

いられるぐらいの自給率が望ましいと思っている。地震で橋が落ちたりしても安心だ。

細々と経営していたいので、ブランド乳などにはあまり興味はない。できればしてもいいかな?ぐらいにしか思っていない。ただ、私の夢を聞いた人たちの中には、将来の夢がパティシエだったりする人も多数いる。そんな人たちが近い未来本当にその職に就くことができていたら、私の牧場でとれた牛乳を使ってほしいと思う。

また、母に聞いた話なのだが、前に自給自足の生活をしている人がテレビで出たという。その人は30代の女性で、田舎に一人暮らしをしているそうだ。女1人の身でも、土地も借りれるし農業機械も借りれる。全く知識のない状態でもその土地の人に教えてもらい、暮らしているのだそうだ。その人は、蜂を飼って蜂蜜を採り、それを砂糖代わりにして使ったり、石鹸を自分で作ったりもしているのだという。

私はその話を聞いて、かなりの衝撃を受けた。そんな夢のような話があるのかと、耳を疑った。

私もそんな暮らしがしてみたい。あまり利益は望まない。自分で満足のいく生活ができれば、それでいい。こんな私でもミッキーになれる気がした。

でも、世の中そんなに甘くないことはわかっているつもりだ。だから私はたくさんの牧場に研修に行き、たくさん牛とふれあい、自給自足のために必要な知識もたくさん勉強する。

いつか私の夢の牧場に、ずっと応援してくれている親を呼びたい。農家育ちの母は、老後の生活を田舎で過ごすことを楽しみにしている。でも、娘にプレッシャーをかけてはいけないと思っているのか、あまり過剰な期待をしてこない母は、私にとってすごくありがたい。自分のペースで頑張れる。

先日、母の実家へ行ったとき、母と仲良く話す元気の良いオバチャンに会った。初めて見る顔だった。私の歳を聞き、高校を聞いた。私が農林高校生だと知ると、その人は私にこう言った。

「いまどき農業を選ぶなんてすごいね!これからは農業の時代だよ。土や動物は人に元気をくれる。アタシだって、こんな片目も片耳も使えない体になっても、こんなに元気でいられる。土や動物をいじるってのはいいことだよ。いつまでも元気でいられる。アンタはいい夢を持ったね。」

そう言われて、私はすごく嬉しかった。

後々母に聞いてみると、その人は事故で五体満足ではなくなっているという。それなのにあんなに元気に生活している。

私は改めて土のすごさ、農業のすごさを知った。

牧場を作ろう。動物をたくさん飼って、作物をたくさん作って。そして私はそのオバチャンの様な、みんなに農業の楽しさ・素晴らしさを伝えられるようなミッキーになりたいと思った。